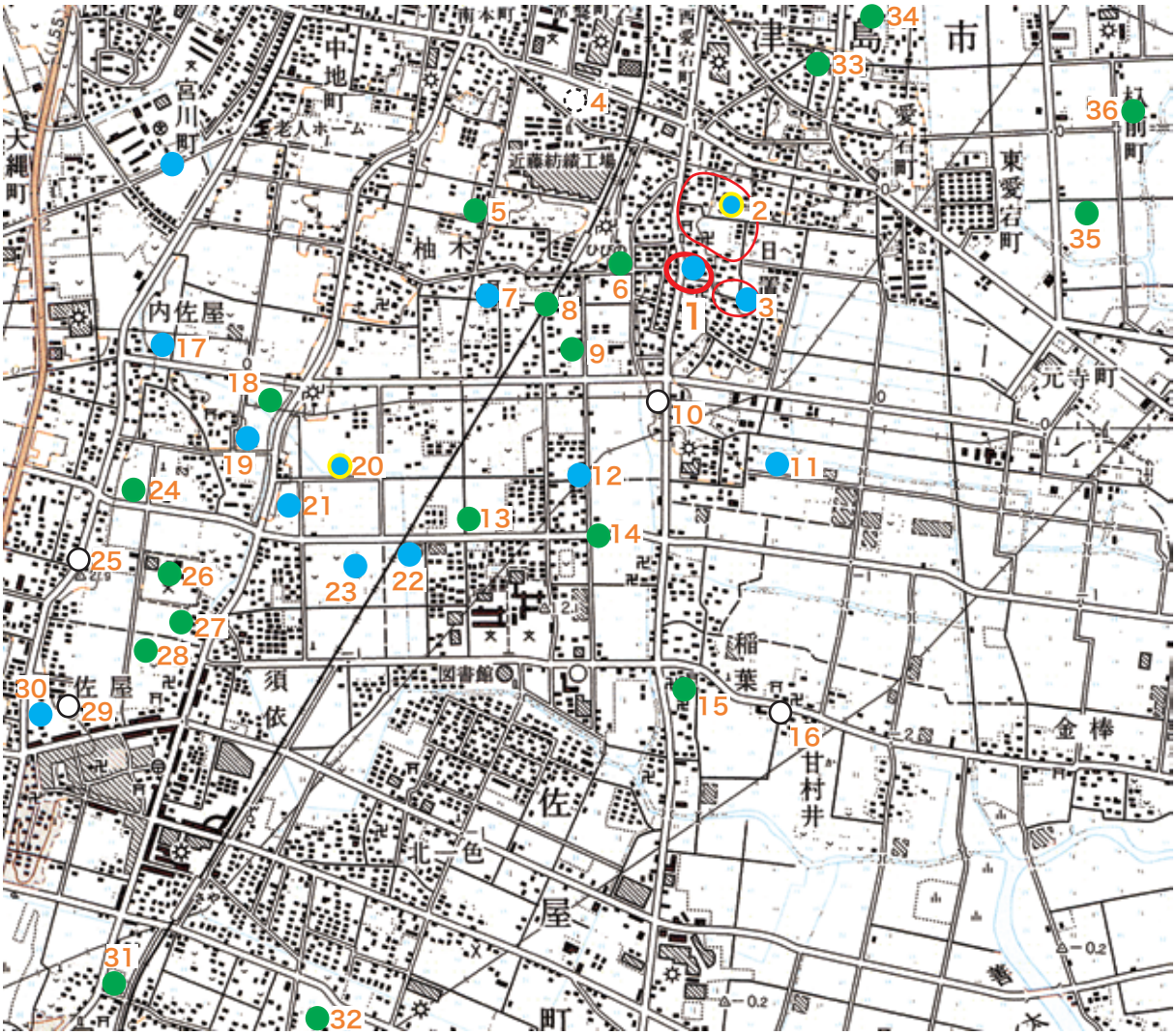
日置本郷 B 遺跡現地説明会資料

2010 年 1 月 30 日（土）

主　催　（財）愛知県教育・スポーツ振興財団
　　愛知県埋蔵文化財センター

支　援　朝日航洋株式会社



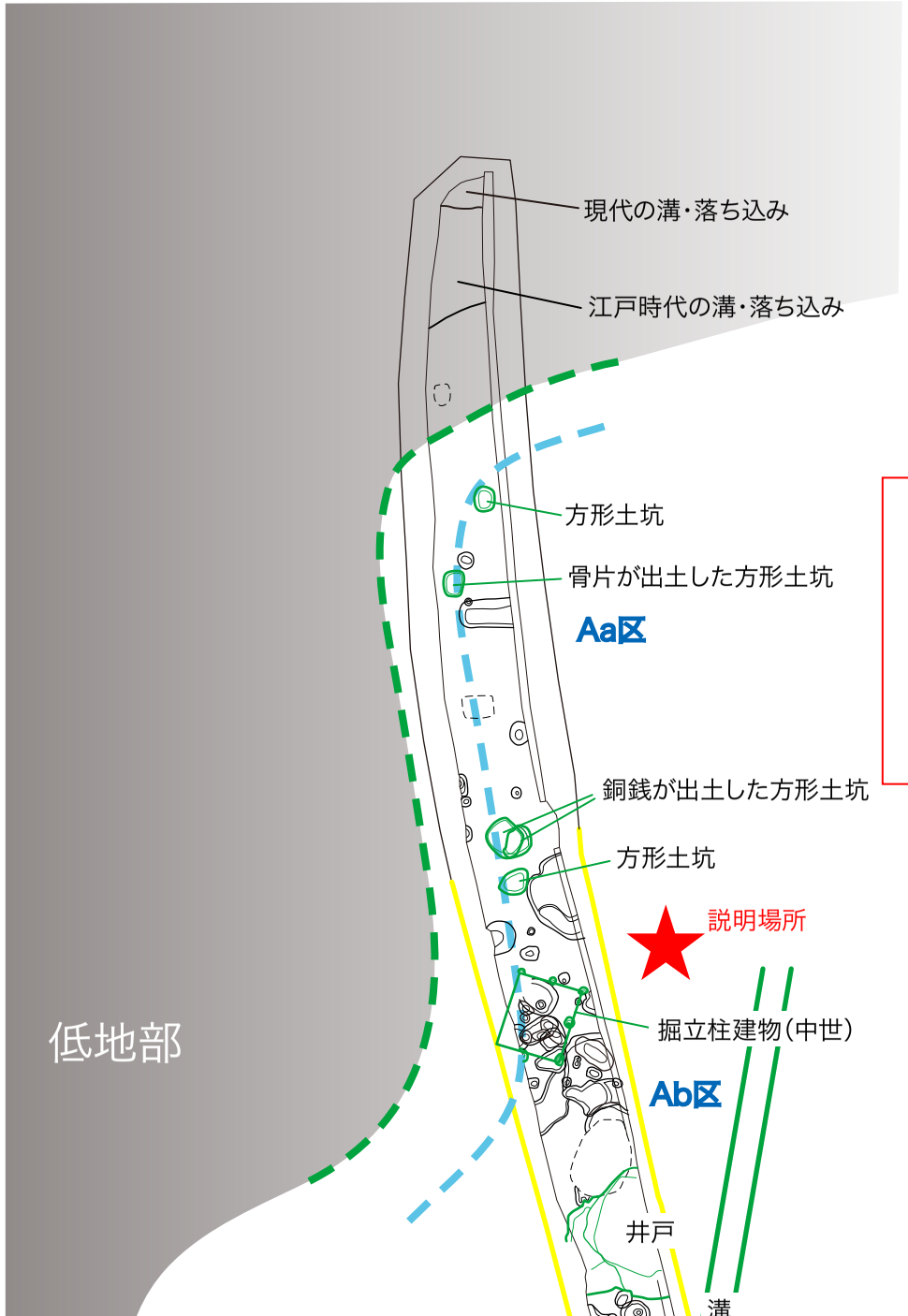
弥生～古墳、古代、中世　古代、中世　中世　近世

愛西市：1 日置本郷 B 遺跡　2 日置八幡社遺跡　3 日置本郷 A 遺跡　4 山の池遺跡（古墓）　5 中田面遺跡
6 河平遺跡　7 八百歩遺跡　8 上川田 A 遺跡　9 上川田 B 遺跡　10 二橋 A 遺跡　11 二橋 B 遺跡
12 米野 A 遺跡　13 白山遺跡　14 米野 B 遺跡　15 稲葉本郷遺跡　16 西出割遺跡　17 松原遺跡
18 五反田遺跡　19 内佐屋郷遺跡　20 砂山 A 遺跡　21 砂山 B 遺跡　22 庄屋敷遺跡　23 元屋敷遺跡
24 河原遺跡　25 道西遺跡　26 道東 A 遺跡　27 道東 B 遺跡　28 道東 C 遺跡　29 宅地 A 遺跡
30 宅地 B 遺跡　31 星の宮遺跡　32 権右遺跡

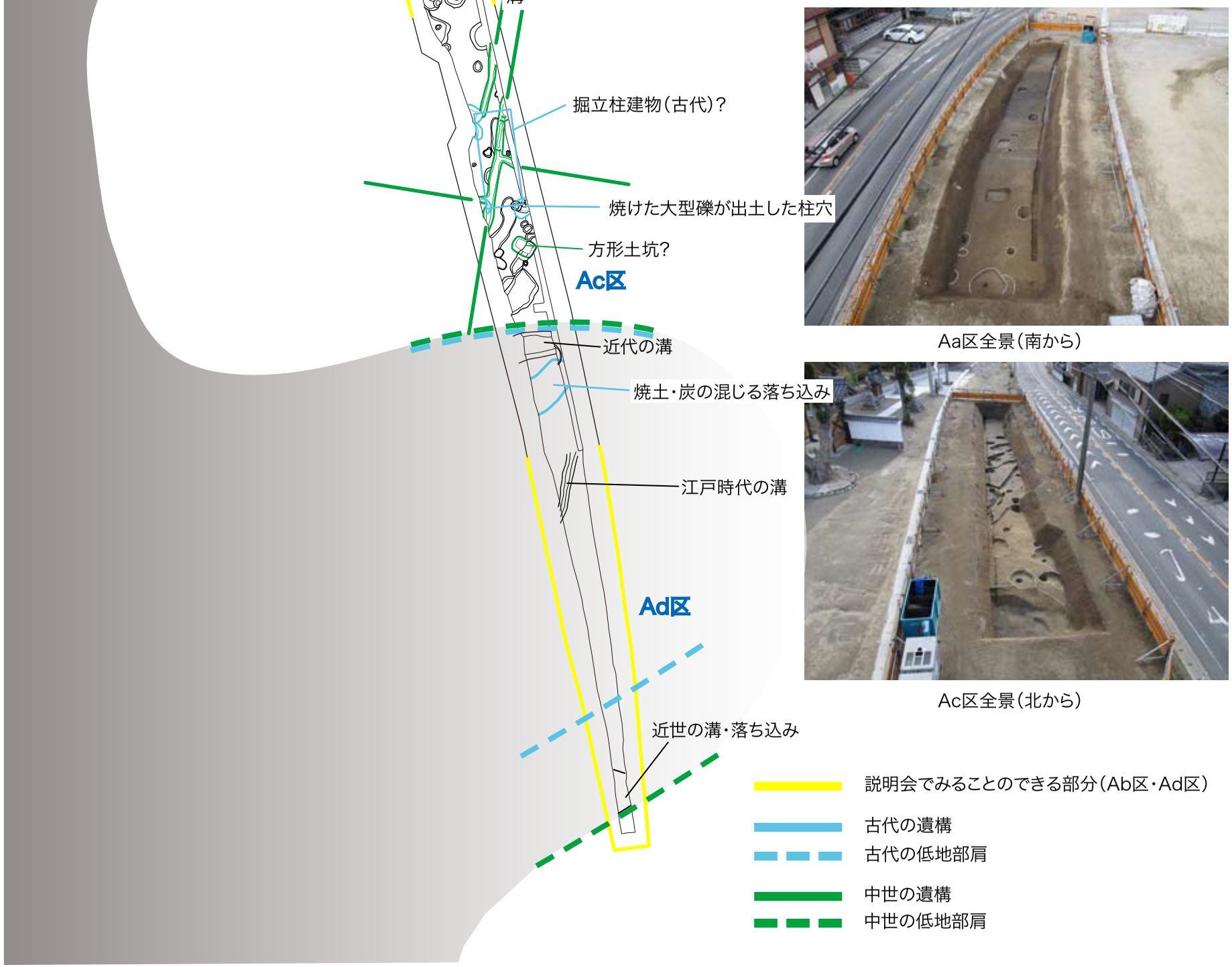
津島市：33 愛宕遺跡　34 愛宕町 4 丁目遺跡　35 杠前町 3 丁目遺跡　36 杠前町 2 丁目遺跡

『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』愛知県教育委員会（1994）を改変

日置本郷B遺跡A区
主要遺構配置図
（1/300）



日置八幡宮



Aa区全景(南から)

Ac区全景(北から)

日置本郷 B 遺跡の位置

日置本郷B遺跡は愛西市日置町本郷に所在します。遺跡は、木曽川の支流によって作られた沖積地に立地します。現在遺構は標高は−2〜2.4mの高さで見つかりますが、地盤沈下や後の時期に削平されていること考えると、遺跡があった古代や中世には海抜0mからやや下がったところに生活面あっと想定されます。

発掘調査の経緯

発掘調査は、「県道 富島津島線 自転車歩行者道設置工事」に伴う事前調査として、平成 21 年 11 月から平成 22 年 2 月の予定で実施しております。調査面積は 1100 ㎡で、大きく A〜C 区の三ヶ所で実施します。今回の説明会では、これまでに終了している A 区の成果をご覧いただきます。A 区は土置き場や車両進入路の関係で、さらに Aa・Ab・Ac・Ad 区の 4 調査区に分割して調査を行っており、実際に見ることができるのは Ab 区と Ad 区部分になります。

発掘調査の成果

これまでに古墳時代から江戸時代までの様々な遺物や遺構が発見されました。特に奈良〜平安時代（古代）と鎌倉〜室町時代（中世）のものが注目されます。

● 旧地形

今回見つかった建物などの遺構は、水がつかない微高地部分に作られています。この微高地の北と西側はゆるやかに落ちる低地部にと考えられ、さらに Ac 区の南側から Ad 区の南端までの間にも低地部が入り込んでいます。そのため微高地は西側に張り出したような形になります。

● 奈良〜平安時代（1300〜1000 年前）：古代

遺物は 1400 年程前の古墳時代末・飛鳥時代のものが少量出土していますが、遺構などははっきりしません。その後奈良〜平安時代になると遺物の出土量が急増し、Ac 区で掘立柱建物の柱穴と思われる土坑が 3 個見つかっています。このうち南西の柱穴から、焼けた大型砂岩礫が出土しています。またその南側の低地部では焼土や炭化物が多く混じる落ち込みが見つかっており、焼けた礫との関連が想定されます。

須恵器・灰釉陶器・土師器などの他、刻書された須恵器鉢緑釉陶器、製塩土器などが出土しています。

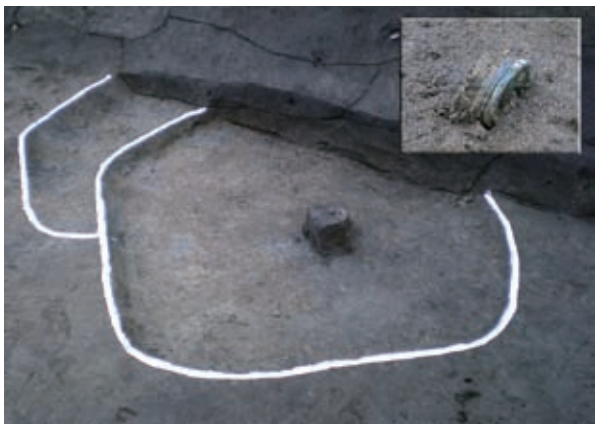
● 鎌倉〜室町時代（800〜500 年前）：中世

今回の調査では遺物量のもっとも多い時期になります。Ab 区では掘立柱建物 1 棟、Ac 区では建物の方向に向きを合わせるような 2 本の溝が見つかっています。この溝は西側のものは途中で途切れ、東側ものには直角に交わる溝があります。また掘立柱建物の南側では、大型の井戸も見られます。これらの遺構は、家と井戸を含む居住空間と、それらを囲む溝と想定することができます。また北側の Aa 区では、骨片・銅銭・土器が出土する隅が丸い方形土坑が 5 個見つかり、墓の可能性が高いと考えています。

山茶碗・小皿、常滑産甕・鉢の他、墨書された山茶碗や銅銭（中国銭）が 22 枚出土しています。これらの銅銭はひとつの方形土坑から 10 枚、もうひとつから 12 枚出土しています。

焼けた大型礫が出土した柱穴

焼土・炭化物が混じる落ち込みと土器出土状況


銅銭が出土した方形土坑

中世の溝

※ 土坑（どこう）：人為的に掘った穴の総称。
※ 掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）：地面に穴を掘りくぼめて礎石を用いず、そのまま柱（掘立柱）を立て地面を底床とした建物。
※ 土師器（はじき）：古墳時代以降の素焼きの土器の総称。
※ 須恵器（すえき）：古墳時代から平安時代まで生産されたロクロを用いて作られた陶質土器。
※ 灰釉陶器（かいゆうとうき）：奈良・平安時代に植物灰の釉（うわぐすり）を施し、瀬戸近くの猿投（さなげ）窯を中心に焼かれた陶器。同じ頃焼かれた緑釉陶器（りょくゆうとうき）は鉛が入った釉薬を使用したもので、全体が黄緑色・緑色を呈する。
※ 山茶碗（やまちゃわん）：鎌倉時代から室町時代にかけて東海地方一帯で焼かれた無釉の碗、小皿を主体とした製品。